

ト腰を掛けよろしく有て
水を一ぱい下せいでイヤ誰と居ねへ田舎のんきお物だお

トたべこそをのんで居る奥よりいせん正助出て来り

助これのお出であさい升お暑いことをござい升ナ

竹イヤ暑いの候の何んにつて土用中より余程あつい爰らの水

ハ冷ッてい、ね

馬へい清水でムい升からつめとふムい升

竹そいつの強氣だ一杯おくれお

馬ハイツめたいのを一寸汲で上げ升ふ

ト榎の陰へ正助手桶持は入る此内竹六よろしく有て正助

直に手桶をもつて出て

サアおたんとお上りあさい升

ト茶碗に汲んで出す竹六のんで

竹ア、つめていい、水だ活かへつた様だ

ト小だらひを出し水をくんで

正サアお手拭でもお絞りあさい升

竹イヤこれの有がてへ

ト捨せりふいひ乍ら竹六手拭を絞り身内あどふく事有て

正ああた江戶のお方の様でムり升が此赤塚のどこへお出で

あさい升ナ

竹何どこへも行かねへわさく此松月院にある乳房榎へ願懸

けに来たのだ

正夫でいお乳のお願懸けでムい升か

ト此内竹六正助の顔を見て

竹モシ、おまへの正助さんじゃアあいか

正、エ、

怪談乳榎

ト悔りあし竹六を見て
チ、お前さんの竹六さんでいなか
竹六にふ久しぶりでマア不思議だねへこんる所でお目よ懸る
とハ

正イヤわしらもたまげたよ
竹然しマアお丈夫で結構だ

正おめへ様も達者でい、の

竹マアけふ迄の達者だが○ア、夫でい何かへ愛のな内のお前
のお住居かへ

正ハア猫の額へ程お内でがんすがわしが内でもムへ升よ

竹成程お前の田舎の練馬在だといつて居あすつたがバツど在
所へ引込みのちんと田地畑を取かへして隠居仕事に此茶
見世を出してお出といふ筋かねお羨ましいね

怪談乳房榎

正ナニそふあらよいけんぞおめへさん

ト思入有て

モシ浪江さんのお達者でお出かね

竹エ柳島の旦那かへお達者さ

正夫でい未だに浪江さんの所へゆきあさるかね

竹相變らずお出入りをしますよ

正エ、夫で行あさるかホイ

ト飛んだ人に出合つたといふ思入竹六様して

竹ア、コレ正助さんわつちの相變らず真與島様へお出入りの

するがねおめへさんに愛で逢つたあんどといふ事ハ決して

いやアしねへからお案事であ

正エ夫でいわしに逢つた事をおめへらにいわつしやらぬかへ

竹云わねへ共く實ハわつちも浪江さまを先生の御後へお世

話をして直したのハアイヤ悪い氣でした事でもあいが後
 で考がへて見ると三年あに落合でせん先生の殺された
 のも何だか變ぼうらいさ一件さ
 ト邊りへこあし有て
 夫や是やを考へて見ると悪い人をお世話をしたと今でハ
 後悔さ夫だからお前の事おどのおくびにも出しのしあいよ
 正夫でわしよ逢つた事の内々にしてくだせへよ
 竹いひよ決してお案事でない實のねけふ此白山さまへ願懸に
 來たのも是に譯がある事マア聞て下せへ
 ト合方又成り
 浪江探が先生の跡へ直つてからメキ／＼と様子替つて今
 じやアお山の大将をれ獨りで先の先生の法事もろく／＼せ
 す酒の毎日一升づゝものむしすつかり地金を願ひして仕

つたがたゞ不思議な御新造とめつぼふけへ中がよくお前
 も知つての通り帯のお祝ひから十月目に安／＼産だのハ女
 の子でヌラ／＼と肥立たが今年に成つてからは新造の乳の
 上へちよひどした腫物が出来たと思ひあさいサアすると此
 でき物が段／＼廣がつて今じやア兩の乳一ばい又成つてふ
 しぎあの内其でき物の口がトント先の旦那の顔の様又見へ
 るのでア、話してもぞつとするがね夜に成るとは新造が
 ゆるして下さい旦那さまわたしが悪ふムり升たさサモ苦し
 そう又浮言をいふのだがね是又付ても落合の一件ハもしや
 は新造と言合せてやつけたのかも知れねへ所で乳が出さ
 くあつたから二ツに成る様様ハヒイ／＼といつて寝づに泣
 くので道がの浪江さんも大廻り或人が此赤塚の乳房櫻のお
 水を取いて呑むとさん出る乳でも出るといふので此曇

怪談乳房榎

いのに代参にいつて来てくれと頼まれやうく聞乍ら来た

トこゝろし有て

イヤ夫に付てもアノ時お前がつれて出たぼうさまハ○何かへせこそへボカト○何さ里親の所へ連れていつたのがどふして納まりを付あすたね

ト正助の實あき思入有て

正内外の事を知りぬいてゐるおめいらにかさつて話したつてむだ、からほんまの事を話すべいが

ト合方きつぱりと成り

實のあの時金を貰らひ十二社の○イヤ十二三に成る迄此子を預つてくれだが家内への里又遣ハす体にして腐たから手前此子を連れて欠落ちをしてくれ暫時の間手前ハ悪ものに

怪談乳房榎

成つてくれいやだといふあら是だどたんびらを引ぬきて威すだにつちをさつちもいかねへから受合て坊さまを連れて此在所へ引込爰が先の旦那へ御恩返しと思つてお育て申したいがあんか悪人の浪江さんだからもし此事をおめへらがしやべると夫こそ直に殺し兼ねへからさふぞをらに違つた事ハエ、かへいつて下さるあよ

ト竹六も思入有て

竹ア、そふいふわけかへ○夫ハよくマアボカトやらあいで○ナニヤ夫ハよく育てゝあげあすつた感心だ思義ものだまらひく

正ナニ主人のいひ付だつて道に曲つた事をするのハ思義じやアねへそう型められるとわし面目ねへよ
トこゝろし

竹「何お前御主人のお子を育て、上るといふのはこりやア忠義の心があつくツちやア出来ねへ事だ

ト爰へ下手より前幕の眞與太郎田舎もの、子役はだしにて糸へ付たる蜻蛉を持出て来り

眞與太郎「おぢいさんをらバ盆踊りの單物、もふ出来たか早く着せてくんあよ

正「何だ、つて盆踊りの單物を晩ふあると着せるからせがますに居あさい

ト件のだんぼを見て
ア、コレ又殺生さつしやるかへけふの盆の精靈様だそん

あ悪いたづらをしねへでとんぼを逃してやんあさい
眞與「サ、とんぼをそんあら逃すから逃し賃に四文くんあ

正「アレ又だめだ何ぞといふと鏡はしがるの

眞與「夫でと羊羔がたべたい物

ト指をくはへあまたれる思入竹六見て

竹「サ、此お子の成程柳島の坊さまだねサ、坊さまだく

眞與「をらア坊さまじゃねへ髪の毛があるよ

竹「坊さまであけれバ眞與太郎さまだマアおかはいそふだ

トホロリと思入有て

色が眞黒にあつて頭いといふと赤い毛で散バラ髪短けへ單物で此あついのにはだしどわかかわいさふナ〇モ竹六ぢいやアですよ見忘れておしまひあすつたかね

眞與「ア、お前は髪をいつでも持つて居るぢいやアだね

竹「ハ、左様でよく忘れずにお出であすつた終おとし迄かひこぐるみで坊さまくといつたか子が儘か足懸け二年でこんあ田舎ッ子に成つておしまひあさるといおかはいそだ

○坊さまわたくしがお小遣ひを上げ升
ト紙入より二朱金を包んで出し
正助さんこりやア少し平らだが坊さまに單物でも買つて上
て下せへ
ト出すを押返し

正何だかしんねへが心配懸けての濟ねへマアよしにしあさい
竹何そんな押問答をする程あもんじやアねへどふかぼつちま
に上ておくんあせへ

正夫でお志し頂いて置升べい
ト件の紙包を頂く子役見てはしき思入にて
眞與何だか早く中をあけてお見せよ

正よ、コレ外開の悪いそんなやしい事のはねへもんだ
ト竹六に開へ面目あいといふ思入ト竹六のあし有て

竹イヤ昔しばあしにひまどつて肝心の用を忘れた夫でん松月
院へいつてお経を上て貰つてお水を頂くとしやうかぬ
正夫でん竹筒のいゝのをよつて置升べい
竹成丈太いのをよつて下さい
眞與「モウおぢさん歸るのかへ
竹今度来た時よ

ト立上るを道具替りのしらせ
いひおみやを買つて来てあげ升ふね

ト竹六子役の脊中をさする正助此体を見て情けあとい
ふ思入此仕組よろしく在郷唄にて道具廻る
本舞臺四幕目重信内庭口の道具よろしく稽古唄にて道具留る
ト直に奥より山井養仙坊主かつら羽織着流し一本ざし留
者よて下女お花案内して出て來り

おはあ「おいそがしい中をお見舞下さい升て有がとふムリ升る
 養仙「イヤお取込のお中お見送りでの却つて痛み入り升る
 はあ「シては新造様の御容体いかいてムリ升る
 養「それバでムる元來今度の腫物の名の付様のあい一皿のは
 れ物是が難症でも乳がんどか何と申すあら又治療のいた
 し方もムるが誠に困つた病ひで殆んど愚老も七を投げ升た
 はあ「夫の困つた事でもムリ升る
 養「然し只今さし上げた膏藥が相應してふつきらば忽ちお痛み止
 りとそれ様と思ひ升からマア御大切にささるがよろしムる
 ト門口へ来る
 はあ「それ立でムリ升る
 ト是にて下手より細かんぱん腹懸の醫者の供出て草り
 直す

養「左様あらは主人へよろしく
 トけいこ唄にて養仙供付て向ふへは入るこあし有て
 はな「今養仙様のお詞では名の付られぬおでさだとおつしやつ
 たがお痛み斗りかお乳の出あいで赤さまがむづかるし
 旦那さまのあじれさるし奉公人のこつばいだが夫に付て
 も赤塚へお願懸にいつた竹六さんのもふ歸りさふ物でム
 んすナア
 ト唄さつばりに成り向ふよりいせん竹六竹筒を持って出
 て来り
 竹「三枚で飛したので思ひの外早かつたが新造の腫物のどう
 せあたりめへの病氣を思われねへから此の水も殊えよる
 と湯水同様は病人に利目がねへかも知れねへわい
 ト門口をあけ

怪談乳房櫻

へい今歸り升た
 はき「チ、竹六さんお歸りでムんしたかモウさつきから旦那様
 もは新造もお待ちはつてムり升
 件「わちつとさふたらふと思ふてね三枚で乗付たが練馬までの
 道がおもしろくねへもんだからめつばふけへ骨が折たよ
 はる「夫の苦勞でムり升たお歸りの事をお奥へおしらせ申し
 升ふわいな
 ト立ふとする此時奥にて
 浪江「アイヤ參るに及ばぬ夫へ參るぞ
 ト合方きつぱりに成り奥より前幕の浪江好みのこしらへ
 一本さしにて出て來り
 ナ、大儀であつた
 竹是の旦那さま大急ぎで參つたの參り升たがけふの別段の懸

怪談乳房櫻

さで練馬の原をせの焼た砂がボク／＼して駕屋も大汗に成
 つて漸々の事で先へ行付升とかつしやつた通り松月院とい
 ん田舎寺がムり升てその境内に大きな榎の木があり升が
 不思議あのの其うるに瘡の標ある者があつて其先からボツリ
 く、乳の標あ白い水が落升夫を頂いて此通り竹筒へ入れ
 て夫からお經料を納めてよく願つてやう／＼の事で歸り升
 た
 ト件の竹筒を出し
 もし是の鹿末よの出來あいそふで中／＼あらたかだと申升
 夫に不思議な事いね其門前の茶屋に正助が
 ト口走りあわて、言直し
 イエナニ正しやうぢきそうを親仁がをり升しナニ其親仁が
 世辭でねあつたついで二朱茶代をばづみ升てムり升た

怪談乳房榎

浪竹六トよろしくいひ紛らす浪江思入有て
 手前只今其門前で正助がと申懸けたが夫での先年家出
 いたした正助がとつて其方面會いたしたと申のか
 竹エナン正助さんには逢ひ升ぬ正助さんの樹を正直さふを親
 仁がをつたと申升たのでムい升
ト汗をぬぐい居る
 浪夫での正助に面會の致さぬと申のじやナ
 竹正助さんぞに逢ひ升ぬ
 浪然と左様か
 竹へイ何であまたへうそをつき升ふ
 浪逢ぬとあらバ夫でよい○コリヤ花待衆てをるから其竹筒
 の水をバ少しも早くかれに頂かしてくれい
 はあ「畏り升た

怪談乳房榎

浪コリヤ竹六ト作の竹筒を待てお花奥へは入る跡浪江思入有て
 是へ參れ
 竹へ、
ト薄氣味悪き思入よてとぢこかし
 浪コリヤ竹六其方只今正助と申懸て余の事にまぎらしたがか
 れ其方も存じをる通り真與太郎を召連れ衣類其外を持逃
 げいたせしむつくいやつ面會致したら致したと申せ○迷て
 申さぬとあれバカウダぞ
ト脇差をぬき竹六の目先へ突付ける是よて悔りあし
 竹エ、申升くく
 浪サア有ていに申すか
 竹申升く○マアいひ升から夫を箱へ納めおはつて下さい
 浪申すとあれバ

怪談乳房覆

ト箱へ納め

面會いたしたに相違あからふナ

竹實の逢ひ升てムリ升が正助も身に罪があると見へてどうぞ

旦那へいつてくれるをくれ〜願まれ升たもんだから

いふまいと思つたにツイ口が返つてこりヤア飛んだ事に成

つた

浪イヤ〜かれに面會いたしたら必らずまだ外に面會いたし

たものがあらふナ

竹エ、〇ナニ外にムリ升ぬ

浪何あいな事があらふ真與太郎と逢ふたであらふナ

竹よく存知で

ト胸りあし

浪知らいで何といたさふ案ずる所かれ真與太郎を連れて在所



怪談乳房傾

へ立越へひそみ居ると登へたり定めし此浪江を父を討し敵
を存じ違ひ恨んでをるの必定此上へ赤塚へ尋ね参りわが無
念を説き正助ゆが不埒の科を責めねば成らぬサ其方案内
たせ

竹エ、……○是ハア情けさい私しに柔内をしるそのは胸
でふり升

浪何が胸窓じや是非共同伴致しくりやれ

竹あるたの顔みゆへ一所に参らぬその申升ぬがけふあつ
い所を歩行き升たせいにかア、疝氣があたまで差込んで来た
ア、くるしい

ト俄かに病氣の起りし体よてあたまやら胸やら押へ苦痛
の思入

浪何俄かに疝氣差起りしとあ然らば驚にて連ゆかんサ、支度

致せ

竹ア、削けさいア、苦しい

ト竹六の切なき思入にて段々跡すさりしてト、門口の

所へ半身出し草りを取て

斯ふいたし升てハ所詮お供ハ出来升ぬア、苦しい

トいひ乍ら草りをはき浪江のすきを見てこいつの堪らぬ

ト竹六向ふへ一さんに逃ては入る浪江跡見送り

浪白及のおとしに正助めが赤塚村に居る事を聞出だせしハ天

の與へ生來愚直のかやつゆへ何も仕出かす氣遣ひさけれど

敵の片われアノ小作時刻うつらバ此身の破滅是より直に怨

を飛ばせ兩人共に討果し後の憂を除きくれん

ト奥へ向ひ

はあのをらぬか刀を持てく

ト此時奥にて

はあ「其お刀の私しが只今持て参り升る

浪「やそふいふ聲ハおきせでハかいか

きせ「ハイ私しでムリ升る

ト奥より前幕のおきせ病人好みのことしらへにて浪江の刀

を抱へ持出て來り苦しき体にて

旦那さまいづれへお出さされ升る

浪「そちや病人でハかいか風に當らバ痛みが増さんやはり床に

居やるがよいぞ

きせ「イエー床よのをられ升ぬあたハかたみの具奥太郎や

あの正助を殺しよお出で成され升ゆへ夫をお止め申さふと

存じ升て

浪何ぞ

トねどりの合方に成り
 きせ「恨めしい大悪人の磯貝浪江汝妻も戀慕のあまり正助をか
 たらいわれを落合の堤みて暗殺あし思いのまゝに不儀を遂
 げ猶又一子眞與太郎を失ふんと致せし大悪無道おきせが
 乳のはれ物も苦痛させたるの皆此重信が一念のあす所今よ
 思を知らせてくれん
 ト陰火もへて重信乗移りし休みていふ浪江思入有て
 浪扱てのおきせが難病も重信己れが業であつたか此上の眞與
 太郎正助もろとも討果し跡からやるから眞士よて我子のゆ
 くを待てをれ
 きせ「イエ〜やらぬやりのせぬ
 トおきせに成り浪江の足へ縋り付留る浪江こゝし有て
 浪、エ、そこ放せとめだて致すか

きせ「イヤ〜汝を今やつての掙が本留の妨げゆへすぐはりのや
 らぬ〜
 ト又重信に成りとめるト、浪江刀をぬき
 浪、さまたげ致さばもよ是迄
 トおきせと思ひ顔を見る浪江の目に重信を見へる思入
 にて
 ヤ妻と思ひし其方の重信ありしか
 きせ「マア〜待て下さい升
 ト又おきせに成り留る
 浪、エ、面倒あ
 ト一寸立廻つておきせをホント切る
 きせ「こりや何故にわたし迄
 浪、とふゆふ聲のおきせであつたか〇ホイ〇

怪談乳房榎

ト刀を持ちせうと成るを道具替りの知らせ
不便な事を致したるア

ト始終ト口く早き合方又此道具廻る
本舞臺三間常足わら茸の家体正面上手佛檀是に精靈棚を飾り
是に續いて風の破れかへ是に眺らへ四幕目の大津絵の鬼の念
佛の書張てある事此家体竹椽付香ぬぎの根ッ子初手の道具見
世付を下手に見せ同じ座敷へつひたる世話場道具都て正
助住居奥の間の体いせんの覆の大樹を下手の奥へ殘し上の方
寺の卵塔場柳の立木なぞ見せ幹先に三界萬靈を書たる白張の
盆提灯をつけ此二重の上手に序幕の重信弟主水紋付の帷子袴
大少よて扣へ下手にいせんの正助出及庖丁を腹へ突立血紅に
成り是を眞與太郎盆踊の揃ひの派手浴衣にて取廻り居る此
見得早き合方にて道具廻る

怪談乳房榎

主水「こりや正助何ゆへの切腹あるぞ
正何ゆへとの主水さま死あねばあらぬ此身の科か聞きあされ
て下さり升せ

ト竹笛入りの合方又成り
生れ質から人様に正直ものと言はれたゆへ曲つた事ハ一生
涯しまいと思ひ何事を慎んで居る此正助いがある隠れがさ
したるか悪人浪江よかたらぬれ重信様ハ親の敵と孝といふ
字についはだされ又二ツに父の代に質入させし田畑を受
戻したいバつかりに姿美に目がくれ落合よて旦那さまを浪
江めが殺す時又助力をさし跡よて聞けばは新造と遠に不義
を働らいてをるその事に口惜しく己れやれと思しが生れ付
いて土百性刃向ふ事が出来ぬのみか又候是る眞與太郎様
を十二社の大滝へ投込みお命縮めんとつひさせぬ浪江

怪談乳房樓

の頼みいやだと言ふと主殺し所せん遁れぬ身の罪科に余儀
あくかわいや坊様を谷間へ投入歸らんと致せし折に旦那の
怨心改め真與太郎又成人させて弟主水又助太刀頼み父
の仇報ひくれよと大罪をゆるして頼みあされたゆへ此在
所へお連れ申お育申しはや七ツぎふであふたにお手わたし
と思ふ一念届きてかけふ斗らずもあふたのお出殊に今日竹
六より承りしは新造が乳へ出来たる業病又因果の早く巡る
ものと思へば生て居られぬ此身真與太郎さまをかわたし申
せば最早此世又用なき私し此大津繪の旦那様のおかたみ鬼
の様私しでも心の内へ鐘しゆもく念佛申してをり升た少
しも早く敵を討ち浪江の首を旦那さまのか墓へ手向けて下
さり升せ夫が今際のおたのみ主水様坊さま是が此世の
ト真與太郎を引よせ

怪談乳房樓

よく顔を見せて下さり升せ
主切の夫故切腹せしか某し三ヶ年以前お國造と相成り兄重信
が不慮の横死まつた跡目の磯貝浪江と多くの門弟よりつぎ
ひ取極めしおさこしらへて音信あせしも姉が計ひ元より兄
が災難の不審暗れずと思ひしかを申も仕官の身の上今
度出府又取敢へず詮義を還んと思ひしよ不思議や昨夜兄上
がアリくを夢と願ひれ赤塚村の正助を尋ね見よとの告げ
あれバ心あらずも参りし所甥真與太郎又其方に面會し様子
を聞けバ斯くくと今物語し浪江が悪事是より直ちに磯貝
が宅へふん込み兄の仇真與太郎に助太刀あし本望とげるハ
今宵の内正助安堵いたして其方の佛果を得て成佛いたせ
正スリヤ此所へお出でありしも重信様のお告でありしか北お
所しいお詞を冥土へ土産に早おさらバ

真與「ぢいや死んでないやだ〜もつと生きて居て盃踊りを見てから死にや御父さん助けてやつて下さい〜」

ト涙をがらふ

主「甥が歎きの尤しなく三ヶ年の養育の中〜もつて容易あら

ず

正「夫も少しの罪亡し最早思い置く事あり主水さま坊さまさら

バ

ト庖丁を持ちたる手を放し合掌しておつくりと成る

主「チ、事ハ切れしか

真與「ぢいや〜」

ト死がいの廻りをうろくして居る此時ハつたりと音して下手よりいせんの浪江尻はしをり大小出て来り

浪「様子ハ聞た真與島主水がさも共々返り討だぞ

ト刀をぬき急度成る

主「ヤア珍らしや磯貝浪江重ある悪事兄が仇此所へ来りしも兄

の導引覺語いたせ

ト袴のつゆをどつて急度身構へする真與太郎もさつと成

り

真與「と〜さまの敵

ト詰めよる

浪「ヤアござかしき敵よはわりまづがきから先へ

ト切て懸るを主水一寸隔て、

主「無念の血汐に染たる及物は是にて本望

トいせんの出及庖丁をもたせる

浪「何とこしやくあ

ト主水の真與太郎の手を庖丁を持懸へ跡太刀の思入此立

怪談乳房樓

廻りよろしく能程ドロく〜に成り壁に張りし鬼の念佛
の番仕かけよて抜出浪江の前へすつくど立て太刀先の邪
刀を成る是よて浪江切られ受太刀も成り爰を主水付入り
肩先を一ト刀切下る浪江アツト跡じさりする此時伴の鬼
の念佛眞與太郎に乗りうつりし体にて浪江の脇腹へ庖丁
を突貫ぬく此時ドント太鼓の頭を打込む主水之を聞き
主ヤ俄かに聞こへるアノ太鼓ハ
眞與「あれハ踊りのはじまりだよ
主、扱ハ村の習ハしよ盆踊りの初まりありしか
選所を

浪江ハ手負赤がら切付るドロく〜よて鬼の念佛消失せ
元の張書に替る仕懸け能程に渡り柏子に成り上手より物
出男女の盆踊り舞ひの浴衣手拭を吹流しよ冠り草りにて

怪談乳房樓

大勢出て来り是を下座へとり読らへ音頭のやうの唄に成
り下手へ此人数踊りあがら行く浪江此中へわつて入り顔
を隠さよとする主水眞與太郎跡追欠此踊りの中へは入り
浪江眞與太郎を切らふとする眞與太郎踊りの中へ踊り乍
らは入り入乱れの立廻り此内知らせさしに道具廻り
本舞盛元の茶見世はり白山の社覆の木前へ出て来りよろしく
納まる

音頭にて段々盆踊り踊りて廻る此内にて三人立廻りト
主水浪江へ一ト太刀あびせよト成るを
主今ぞ本望思ひ知ったか
ト同じく眞與太郎の庖丁を持そへ兩人にて止めをさす盆
踊りハ是に構はず段々〜向ふへ踊ってゆく此仕組よろし
く

怪談乳房榎

怪談乳房榎

百九十八

明治廿六年三月十七日印刷
明治廿六年三月廿日出版

著作者

神谷彦作

京橋區築地一丁目廿三番地

發行者

內藤加我

日本橋區通四丁目四番地

印刷者

瀧川三代太郎

日本橋區新和泉町一番地

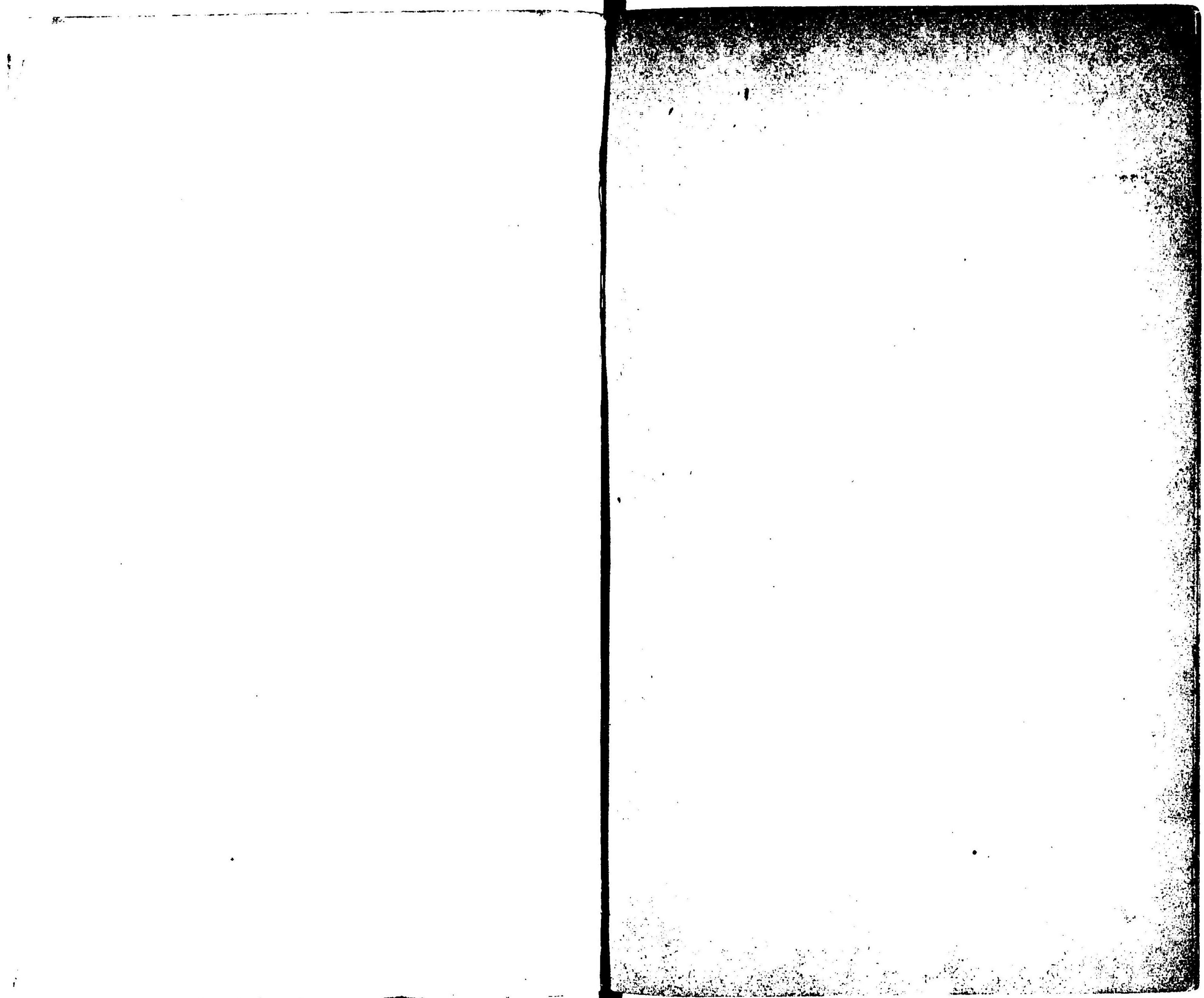
發兌

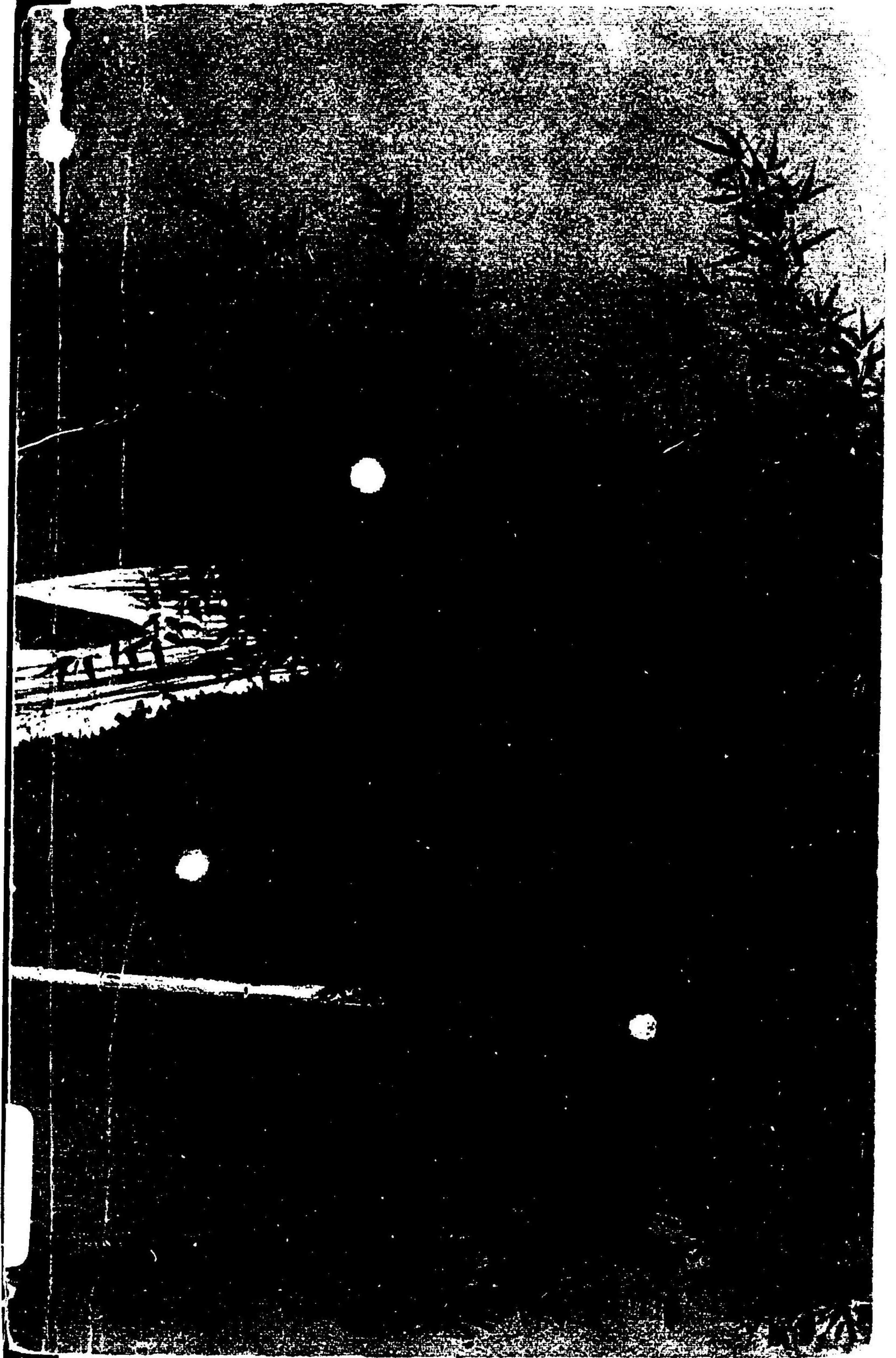
金櫻堂

日本橋區通四丁目四番地



版權所有





特8
429

088834-000-7

特8-429

怪談乳房榎

三遊亭 円朝/原著

M26

DBK-0017

